

めざす児童生徒像

- ・まわりの人を思いやり、協力してよりよい社会を創る子
- ・夢や志をもち、自ら考え、挑戦する子
- ・ふるさとに誇りをもち、発展に貢献する子

※児童生徒結果・教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
学校重点項目 (学校で設定)	児童生徒が主役とな る学校づくり	①②③共に100%	① 学校生活が充実している。	100 A:33.3 B:66.7	95.4 A:55.5 B:39.9	85.7 A:52.6 B:33.1	88.9 A:22.2 B:66.7	95.9 A:61.6 B:34.3	86 A:43.0 B:43.0	・②の項目について、教員は100%を達成できた。また児童生徒の①②の項目のA回答は確実に高くなっており、学校生活の中で達成感を味わうことができていると考える。③の児童生徒の値が低くなっていることについては、教師からの働きかけや価値づけが不十分であったことが伺える。	・③の項目について、「学校をよりよくする」行動や考え方については教師自身がそのねらいや目的を理解し、児童生徒に咀嚼して伝え、考えさせる場を意図的にもつことが必要である。
			② 児童生徒会活動や行事に主体的に協力し合っ て取り組んでいる。	94.4 A:50.0 B:44.4	96 A:58.4 B:37.6		100 A:77.8 B:22.2	97.7 A:62.2 B:35.5			
			③ 学校をよりよくするために考えて行動している。	94.4 A:22.2 B:72.2	90.2 A:42.2 B:48.0		94.4 A:50.0 B:44.4	85.5 A:30.2 B:55.2			
			集計								
重点項目 石川県共通	業務の改善 働き方や	④が100%	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に 取り組んでいる。	72.2 A:33.3 B:38.9			83.3 A:38.9 B:44.4		・目標である④の100%は達成できなかったが、各項目において中間より向上した。職員一人一人が自らの働き方について意識を高め、より良い姿を目指してきた結果だと言える。職員がお互いの仕事を理解し協力し合ってきたことが勤務時間の減少に繋がっている。時間外勤務時間:中間60.5h 最終52.9h	・職員の意識改革が一層必要である。教務と連携し、リスクジェラルの機会を極力減らして日課の定例化を図ったり、定時退庁日の明確化や会議の設定の工夫をしたりなど、ライフワークバランスを意識させるような働きかけを行っていく。	
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫 しながら取り組むことができている。	83.3 A:44.4 B:38.9			88.9 A:33.3 B:55.6				
			③ 各部内の協力体制により、働き方の改善を目指し ている。	66.7 A:16.7 B:50.0			83.3 A:16.7 B:66.7				
			④ 目標退校時間を守るよう心がけている。	72.2 A:22.2 B:50.0			72.2 A:33.3 B:38.9				
小松市共通重点項目	学校研究	①を100%	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、 単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を 共通実践している。	94.4 A:38.9 B:55.6			82.4 A:47.1 B:35.3		①は教員のA評価が1学期に比べ向上した。1学期の結果を受け、2学期は改善のための取組を2点共通理解して取り組んだ。全体の数値は向上しているが、先生方が研究発表に向け授業研究を進めるにあたって、自分の授業に求めるレベルが向上したためと思われる。また、研究発表会を参観して頂いた外部の先生方や講師の先生方からも評価を頂くことができた。	更に向上していくために、以下の2点の取組を進めることとする。 ①個々の教員が教材分析を大事にしている。 ②アナログ・デジタルの使い分けで悩んでいることから、経験を重ね、その中で効果的な事例を共有しながら、どの使い方が有効かどうかの検証を進めていく。	
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を 語ったり、改善案を示したりするなど主体的 に取り組んでいる。	94.4 A:50.0 B:44.4			94.1 A:64.7 B:29.4				
			集計								
	指導力の向上	⑤の児童生徒を100%	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考 え、自分から取り組んでいる。	88.9 A:22.2 B:66.7	91.9 A:47.4 B:44.5		94.1 A:43.5 B:45.3	89 A:23.5 B:46.6	-5.1	⑤のA評価は、1学期は教員と児童・生徒で24%の差があったが、2学期は1.2%に縮まった。2学期は、単元末のふり返りの確実な実施と、単元開始前に、ルーブリックを示したり、つけたい力を教員と児童・生徒が共有したことで、教員と児童・生徒の意識の差が縮んだことが結果に繋がったと考えられる。	児童・生徒が自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりするために、3学期も継続して以下の取組を行う。 (前期課程) ・算教科における「よくわかった・できた」の5段階評価+記述(高学年) (後期課程) ・定期テスト分析と、正答率の低い問題を次のテストで再度取り上げ、正答率(生徒の理解)の差を比較・分析する →後期課程の取組では、比較・分析の結果を確実に生徒に還元する。 ・児童・生徒同士の相互評価の実施 単元終了後に、自己評価をつけてから、4~5人のグループで、なぜその数値をつけたのか、理由とともに述べさせる。友達となぜその数値にしたのかの視点を共有した上で、再度単元のふり返りを記入させることで、評価の基準を高めていく。
			② 児童生徒は、学級の友達と間で話し合う活動 を通じて、自分の考えを深めたり、広げたり することができている。	88.9 A:16.7 B:72.2	95.9 A:54.7 B:41.3		100 A:64.7 B:35.3	93.6 A:50.0 B:43.6	-6.4		
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、 自分の考えがうまく伝わるよう、資料や 文章、話の組み立てなどを工夫して発表して いる。	72.2 A: 5.6 B:66.7	87.9 A:41.6 B:46.2	15.7	82.4 A:23.5 B:58.8	84.9 A:35.5 B:49.4	2.5		
			④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容 を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達 の考え(自分と同じところや違うところ)を受け 止めて自分の考えを伝えている。	100 A:11.1 B:88.9	95.4 A:48.0 B:47.4	-4.6	100 A:29.4 B:70.6	91.9 A:47.1 B:44.8	-8.1		
			⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目 標に沿って自分の学びの変容を実感したり、 学びに対する達成感を得られたりしている。	88.9 A:22.2 B:66.7	90.1 A:45.9 B:44.2	1.2	94.1 A:41.2 B:52.9	89.5 A:42.4 B:47.1	-4.6		
			⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器 を、他の友達と意見を交換したり、調べたり するために使用している。	94.4 A:55.6 B:38.9	98.3 A:79.8 B:18.5	3.9	94.1 A:70.6 B:23.5	97.1 A:72.1 B:25.0	3		
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①②③④⑤⑥共に100%にする。	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標 の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断 的な視点で組み立てている。	83.3 A:16.7 B:66.7			88.2 A:29.4 B:58.8		・②~⑤の肯定的回答が90%以上となり、取組への理解が進み、実践も継続された。 ・①は90%に達しなかったものの、A評価が伸びた。8月のカリキュラムマネジメントの実例提案により、その捉え方と横断的な組み立て方の理解が進み、取組が前進した。 ・⑥は取組の共通理解は図っているが、取組状況を確認する定期的な声かけが少なかったため、肯定的回答が下がったと思われる。	・① 2学期のカリキュラムマネジメントの実例提案により、教科横断的な組み合わせ方の理解が進んだ。3学期もカリキュラムマネジメントの実例紹介し、教科等を関連させた取組案を具体化させ、実践を促進していく。 ・⑥ 定期テスト後、迅速に分析・授業改善を行い、各教科の実践を後期課程の教員で共有する。
				② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程 を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の PDCAサイクルを確立している。	83.3 A:22.2 B:61.1			94.1 A:23.5 B:70.6			
				③ 全職員で学力向上の取組の「実施状況の検証」 及び「成果の検証」について、計画的に実行して いる。	94.4 A:44.4 B:50.0			94.1 A:47.1 B:47.1			
④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、 課題について共有している。(小中連携)				100 A:52.9 B:47.1			94.1 A:58.8 B:35.3				
⑤ 一問分析の結果を基に授業の改善を行う。 (前期)				100 A:45.5 B:54.5			90 A:50.0 B:40.0				
⑥ 定期テスト等の記述問題の結果を分析し、授 業の改善を行う。(後期)				100 A:55.6 B:44.4			76 A:50.0 B:25.0				
家庭学習	①「家で計画を立てて勉強している」 100%にする。(3年生以上) ②「家庭学習で学習用端末を活用する」 100%にする。 ③「家庭学習による成果を実感している」 100%にする。	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し 方等を校内で共通理解を図っている。	88.9 A:22.2 B:66.7	72.7 A:35.3 B:37.4	63.4 A:21.6 B:41.8	-16.2	88.2 A:41.2 B:47.1	73.4 A:35.3 B:35.1	69.7 A:20.3 B:49.4	-14.8	・①は教師のA評価、保護者の肯定的回答が伸びた。児童生徒の回答の伸びは見られなかった。家で計画を立てて勉強している」で自己評価しているが、家庭での学習自体に十分取り組めていない児童生徒が一定数いるためと思われる。 ・②は家庭で学習用端末を活用した学習が定着してきたので、CD評価の児童が8名、生徒が17名と、1学期より減ったと思われる。 ・③は肯定的回答が前期課程は9.2%、後期課程が8.3%と、その差が縮まった。肯定的回答が50%台の学年が1学年あった。家庭学習習慣の定着が不十分な児童生徒は成果の実感までに至らないためと考えられる。
			② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組める よう課題を工夫している。	83.3 A:33.3 B:50.0	76.3 A:57.8 B:18.5		88.2 A:41.2 B:47.1	85.5 A:39.5 B:45.9	-2.7		
			③ 家庭学習による成果を実感している。	87.9 A:51.4 B:36.4			89 A:50.0 B:39.0				
			集計								